



連載第 142 回

「アニマルウェルフェア畜産」の今(その7)
——「家畜福祉セミナー in 八雲」の試みから——

アニマルウェルフェア(家畜福祉。AWと略)の取り組みを畜産が盛んな地域に広めようと、「北海道・農業と動物福祉の研究会」(代表・瀬尾哲也帯広畜産大学講師)が8月下旬、「家畜福祉セミナー in 八雲」を開催した。世界のAW事情に明るい松木洋一さん(日本獣医生命科学大学名誉教授)が急速に畜産革命が進むEU(欧州連合)の最新事情を紹介。地元で「牛の都合に合わせた飼いや、同研究をする若き放牧酪農家と獣医師の対談や、同研究会が進めるAW認証システムづくりに関する報告が続いた。「飼料自給100%」を実現した北里大学八雲牧場なども見学した参加者たちは、AW畜産の今後に向けて手応えを感じ取っていた。



▲北里大学八雲牧場で草を食べる牛たちを見学するセミナー参加者

▲ゆったりと草を食む小栗牧場の牛。ストレスのない飼いや追求している

「家畜と人が互いに満たされ生きる 畜産革命」が世界で進んでいる

放牧へ転換を機にUターン
牛の都合に合わせた酪農へ

渡島管内八雲町の市街地から西に5キロほど行った、放牧酪農の世界ではよく知られる小栗牧場。20年ほど前まで経産牛1頭あたり1万キロ近い生乳を搾っていたが、牛の病気が多発して、介護酪農に陥ったのを機に、1997年から放牧酪農に転

換し、健全経営を続ける。

牧場の4代目・小栗格さん(1977年、八雲町生まれ)は、5年前に経営を引き継いだ。両親の放牧に対する志に共感し、牛と人間のより良い関係をずっと考えてきた。「人間側の大量生産・低価格サイクルをベースにすると、牛や土、草に無理がかかる。僕は、牛と自分の歩幅を合わせ、同じペースで歩いてい

きたい。牛乳やお肉を自然の恵みとして受け取り、人間側に供給するのが筋の通ったやり方じゃないかな」と、牛の都合に合わせた酪農のあり方を追いつめていく。

セミナーの「対談」は、地元の獣医師・末永龍太さん(82年、札幌市生まれ。6月号を参照)が、この種の催しで話すのは初めてという小栗さんをフォロワーする形で始まった。

「やってみたい」と実家に戻る。就農後は、牛の病気や事故に遭遇する場面もあった。

「子牛の哺乳経験がないせいか、下痢で死なせてしまうことが何回かあった。『これじゃ駄目だな。殺したくないな...』と思いました」

法定伝染病で子牛などに発生する腸炎のヨーネ病が発生すると、罹った牛は殺処分せざるを得ない。「かなりの頭数を薬殺したけれど、女性の獣医さんが涙をこらえながら薬を注入していた。これは見たくない場面ですが、『きちんと見届けてやろう』と思いました」と振り返る。

頭でっかちの対応で事故も 自然な姿で牛の世話を追求

放牧に転換後は「牛は草食動物」の原点に立ち返り、無化学肥料で育てた放牧草と採草地から収穫したサイレージ(発酵飼料)をメインに与える。高い乳量を維持するための濃厚飼料は激減させた。小栗さんの頭のなかにも、「配合(濃厚)飼料は良くないなるべく牧草だけで飼いたい」との思いが強かった。

「頭でっかちになっていたんですね。牛の要求レベルに合った飼料を食べ

高校を卒業して北海道立農業大学校(本別町)に進んだころ、小栗さんは大きなフリーストール牛舎で働くことに憧れていた。しかし、実習先の大規模農場は「何か冷たい感じがした」。全体が把握できる実家の牛舎とのギャップがあり、「自分には合わないのかな...」と思う。

小栗牧場はちょうど、両親が放牧酪農に転換した時期だった。「それな

られない状態が長く続いた結果、アルコール不安定乳になってしまった。かなり長い間、バルククーラーの生乳を捨てたんです。牛の毛づやも悪くなり、やせてきました」

と、反省を込めて話す。アルコール不安定乳とは、生乳と70%アルコールを1対1の割合で混合し、凝固物が生じる乳のこと。原因には、環境の変化や疾病の併発ホルモンによる影響が挙げられるが、特に給与飼料の影響が重要視されている。放牧への転換期に起きた乳質の異変は、若い小栗さんに苦い思いを抱かせたようだ。

酪農家で生まれた雄の子牛は、生後1週間ほどで市場に出荷され、肉牛農家の下で育てられる。乳を出さないで、雄子牛を輸送車に乗せた時点で、関心は販売価格の多寡だけに移ることが多い。

小栗さんは、町内で肉牛を扱う知人と話すうちに、雄の子牛に対する見方を変えていく。「それまでは、牛舎から溢れたら肉用に出荷して当たり前というイメージでしたが、(雌牛は)できるだけ妊娠させて出荷し、長く飼ってもらおう、という思いが生まれてきた」



20年近く前に放牧酪農に転換した小栗牧場では夏の間、昼夜放牧をしている。真冬でも屋外での運動を欠かさない。転換時には牛の病気や事故が起きるなど苦労したが、今は牛にも人間にもゆとりが生まれた。セミナーの参加者は牧場を訪れ、牛や草の状態などを観察した(8月30日)

(まつき・よついで) 1974年、東京大学大学院農学研究所博士課程修了。農学博士。オランダ・ワゲニングゲン大学客員教授、日本獣医生命科学大学教授など歴任。日本の家畜福祉研究の第一人者で、とくにヨーロッパの事情に明るい。北海道内を農村調査に歩いた経験も豊富。アグリネイチャー・スチュワード協会理事長。著書『日本農業の事業体分析』(日本経済評論社)、編著『日本とEUの有機畜産』(農文協)など。家畜の健康と福祉についての論文多数。東京都在住。



近代農法の“反省”を踏まえた EUの多様な取り組みに学ぶ

日本獣医生命科学大学名誉教授(農業経済学)

松木洋一さん

『家畜福祉セミナー』の講演から

20世紀型の畜産を見直し 「5つの自由」踏まえて改革

21世紀になって、欧米など畜産先進国は工場的な畜産からの転換をめざし、新しいシステムの開発に取り組んでいます。その基本コンセプトが「ファームアニマルウェルフェア(Farm Animal Welfare)」です。日本では「家畜福祉」と訳されますが、人間の社会保障と混同されやすく、聞き慣れないものです。

そこで僕は、説明の仕方を変えようと考えました。英語の「ウェルフェア」は福祉と訳されていますが、語源の意味は「満たされて(Well)、生きていく(well)」です。ヨーロッパの人たちと話すとき、我々が考えるような社会保障的な福祉の概念より



獣医師の末永さん(写真左)の質問に小栗さんが答える形で「対談」が進んだ

小栗さんは今、両親らとともに70頭近い乳牛(うち経産牛は48頭)を飼う。夏場は昼夜放牧、真冬も屋外での牛の運動を欠かさない。母親の美笑子さんは、自家産生乳で造ったチーズを販売している。

「(牧場で)稼いでいるのは牛たちであり、人間は世話役として動くだけ。牛が当たり前前に歩け、食べて、眠れる——という自然に近い状況をつくるのが僕らの仕事です」

ストレスを抱えていると牛に伝わるので、牛舎に音楽を流すなど自分を緩くして日々を過ごす、という。これからのアニマルウェルフェアのあり方に対しては、

「法律でしぼるのはどうか。家畜

福祉の選択のなかで、これとこれやると乳価を上げると、というやり方が理想ではないか。大切に育てた牛の生乳を評価してくれる人が、少しづつでも広がってほしい」と期待を寄せ、話を締めくくった。

自給飼料100%を実現 「北里八雲牛」からも学ぶ

遊楽部川上流の丘陵地帯に広がる、370ヘクタールの敷地面積を有する北里大学獣医学部の八雲牧場。ここは農場内の草だけで肉牛を育てている日本でも希有な「自給飼料100%」の牧場だ。和牛の日本短角種とフランス原産のサレール種との交雑種を中心に、230頭ほどの肉牛を飼育している。

セミナーの参加者たちは、八雲牧場の見学も行った。

夏場の放牧期間中、母牛たちは放牧地で出産し、半年間、生まれた子牛と一緒に過ごす。舎飼い時も出産後の1カ月間ほど、子牛は直接、母牛の乳を飲んで育つ。畜産業界では、生後まもなく母親から引き剥がされる子牛が大方だけに、ここはアニマルウェルフェアに適った飼育方法を採用している。

牛たちが食べるのは農場の牧草だけで、穀物は与えない。化学肥料や農薬は全く使わず、JAS(日本農林規格)の有機認証も取得した。ストレスのない環境で育った牛たちは適度に肥り、すこぶる健康的だ。

見学会の座学タイムでは、北里大助教で牧場職員の小笠原英毅さんから、「北里八雲牛」の特徴や販路開拓の経緯などについて説明を聞いた。

赤身肉の「北里八雲牛」は、一般流通では真つ当に評価されない。そのため独自ルートを創って販路を開拓してきた。90年代半ばからの東都生協(本部・東京。組合員数23万人)との産直が最大の供給先だ。

同生協では、1700人が「北里八雲牛セット」の会員に登録し、定期的に肉を購入する。牧場側は毎月通信を発行し、牧場の様子や料理レシピなどを紹介。牧場スタッフは東京に出向き、宅配車に同乗して組合員の声に耳を傾ける。こうした努力の結果、会員数が増えている。

牧場だけでは牛肉の供給に限界がある。そこで、「北里八雲牛」の受精卵を酪農家の乳牛に移植し、生まれた子牛を牧草100%で育てる取り組みも進む。その数29頭に増え、地



北里大の八雲牧場では夏の間、放牧地で生まれた子牛は半年間、母牛と一緒に育つ

元農家にすそ野が広がっている。こうした先進的な取り組みは、今後のアニマルウェルフェア畜産に多くの示唆を与えてくれる。

※北海道・農業と動物福祉の研究会と(公社)畜産技術協会は11月21、22の両日、十勝管内で同様のセミナーを開催する。幕別町の「よつ葉放牧生産者指定ノンホモ牛乳」生産農場を見学する一方、松木洋一さん(別項を参照)や自農場の生乳を使って乳製品加工を手がける(有)あすなろファーム(清水町)の村上勇治社長、更別農業高生の友西このみさんらの講演・報告を聴く。参加費1000円。詳細は、同研究会の奥野尚志さん(携帯・090-7514-0354。午後6時以降)まで。

も、「満たされて生きていく状態」と受け止めています。

アニマルウェルフェア(AW)畜産とは、最終的な死を迎えるまで、ストレスから自由で、行動要求を満たされた健康的な状態で家畜を飼育するシステムのこと。さらに人間も、飼育過程のなかで家畜から癒しを受け、満ち足りた状態で共に生きること、と受け止めるというでしょう。

世界のアニマルウェルフェア畜産の原則は、「5つの自由」に依拠しています。それは次のような、家畜にとって自由な飼育方法です。

- ① 飢えと渇きからの自由(健康と活力のために必要な新鮮な水と飼料の給与)
- ② 不快からの自由(畜舎や快適な休息場など適切な飼育環境の整備)
- ③ 痛み、傷、病気からの自由(予防・救急医療や救急処置)
- ④ 正常行動の発現の自由(十分な空間、適切な施設、同種の仲間との存在)
- ⑤ 恐怖や悲しみからの自由(心理的な苦しみを避ける飼育環境の確保と適切な待遇)

僕は最近、関東などの農業者と、「癒しを受ける側面を考えると」5つ

の自由』にもう一つ加えるべきではないか」と話し合っています。人間側が動物から癒しを受ける、という関係性も考えたほうがいい。こうした原則に基づいて今、世界で畜産革命が起きています。

アニマルウェルフェア畜産を実現するには、20世紀の反省が必要です。ヨーロッパでは、近代農法による農業活動のなかで、環境汚染を引き起こし、食の安全を脅かし、生態系を破壊し、動物を虐待してきた——という4つの問題が起きたことを反省しています。そして、効率性や生産性を追求するために、多数の家畜の自由を閉じ込めたことを省み、「5つの自由」で復活させようとしているのです。

日本の場合、欧米で確立された工場の畜産システムを素直に導入してしまっただけで、そのことの反省が足りななかなか乗れない状況があります。

家畜は感受性ある生命存在 雄子豚の去勢廃止も日程に

EU(欧州連合)では2007年、加盟国の憲法ともいえるリスボン条約の第13条において、家畜は単なる

動物保護の市民活動
務的な研究開発 ④
ゲニンゲン大学の実
ン産業助成 ③ワー
ルフェア食品チェー
ン支払い制度 ②オラ
ンダのアニマルウェ
ルフェア食品チェー
ンでは、①EUの直接
支払い制度 ②オラ
ンダのアニマルウェ
ルフェア食品チェー
ン産業助成 ③ワー
ゲニンゲン大学の実
務的な研究開発 ④
動物保護の市民活動



オランダ経済農業省が認めたアニマルウェルフェア食品の認証ロゴマーク(提供:松木洋一)

農産物ではなく、「感受性のある生命存在である」と明文化されました。すべての法律は条約に従わなくてはなりません。この家畜福祉条項に基づいて、法令や政策が次々に整備されてきました。

EUは、99年のWTO交渉から家畜福祉補助政策を主張しています。しかし、アメリカの反対などで受け入れられなかったため、「自分たちでやってしまおう」と多国間協定や家畜福祉食品の表示ラベルを作ったりした。(家畜福祉を進めることで生じる)コストに対する補助金制度はすでに実現しています。

そうしたなか、採卵鶏の従来型バタリーケージ飼育は12年1月をもって禁止されました。妊娠豚用のストール飼育も、13年1月以降は受胎後4週間以降、分娩予定日1週間までの期間、全面禁止されています。とても興味深いのは、かなりラジカルに動き始めていることです。

オランダとドイツ、デンマークは最近、「家畜福祉宣言」を行ない、今年7月にはこの3カ国とスウェーデンがEU委員会に対し、「豚保護指



北海道内でも少しずつ増えている放牧養豚。肥育期間が長くなるが、健康な豚に育つ(檜山管内のせたな町で)

令」の改正を勧告しました。「全農場で豚の断尾を禁止する法令の導入」「飼育面積の拡大」「スノコ床の改善」などを求めています。

もう一つ大きいのは、10年のブリュッセル宣言で、「すべての雄子豚の去勢を18年までに廃止する」と採択したことです。現実には、EU全体では12年現在、80%ほどの雄子豚が去勢されています。その理由の第1は、去勢しない雄の豚肉には不快な臭いがあり、市場が受け入れてこなかったからです。

しかし近年は、市場関係者や消費

いて、①生産から加工までの段階で、法的基準以上の食品 ②環境的で、動物福祉と偽装工作をしないなど社会的規範が考慮されている食品——と定義づけています。そうした食品を伸ばすために、ラベルを貼って認証していくわけです。

独自のAW認証食品マークで販売高が5年間で7倍に

まず、養豚部会とオランダの農業者の組合、動物保護協会が連携し、農業現場で実行できるものとして「快適水準原則」を創りました。オーガニック認証のようなきびしいものではなく、各農場が持っている飼育条件や経営要素を踏まえ、今後の改善計画を示して認証していく、という原則に基づいて推

⑤食品加工流通企業 ⑥有機認証団体 ⑦消費者グループの直売店——を挙げる事ができます。

今、アニマルウェルフェア食品のブランド化の核になっているのが「ベターレーベン」の認証マークです。基準によって星の数一つから3つまで付け、スーパの畜産商品に貼ってあります。ベターレーベン食品の販売額は、08年に6800万ユーロでしたが、13年には4億7300万ユーロと、7倍くらいのご

い勢いで増加しています。アニマルウェルフェアのプライベートブランド(PB)もある。禁止された鶏のケージに代わるものとして、養鶏設備メーカーが開発した「ロンディール」という1カ所3万羽

者への調査で非去勢豚肉への偏見が少なくなったことや、飼料給与の変更、肥育期間の短縮などで、その汚名は弱まっています。去勢を廃止するのは大きな課題ですが、ヨーロッパの人たちは、非去勢のほうが経営的に優位とする科学的な研究の上に、この問題に対応しています。

直接支払いとブランド化を組み合わせたAW食品を振興

アニマルウェルフェア畜産の推進には、付加価値を持った商品として「ウェルフェア・クオリティ(家畜福祉品質)ブランド」を作り、市場経済のなかで家畜福祉食品を実現していく路線と、直接支払いで補助金を支払うやり方があります。(後者は)一定の基準を超える場合、年間500ユーロ(大家畜1頭あたり)が支払われ、政策助成と市場経済のブランド化が連動し、家畜福祉を振興していくとしていきます。

09年の共通農業政策(CAP)改革で、外部からの農薬や肥料などの投入禁止が打ち出されました。ヨーロッパの直接支払いは、自然と共生する農業と家畜福祉の2本柱で動いています。ただ、財政難で補助金行

規模の養鶏システムができています。オランダに2、3カ所しかないのですが、このシステムを日本に売るう

としてい。ベターレーベンの3つ星は有機畜産が条件です。ロンディールは輸入の配合飼料を与えていますが、「3つ星にしよう」との評価になりました。ロンディールの卵は1個40円、有機卵の値段と同程度です。安売りの卵は1個18円くらいなので、2倍ほどになります。

地域とつながる小規模飼育や放牧畜産に新たな可能性

オランダの養豚は、日本と違って施設型が多く、放牧養豚は5農場くらいときわめて少ない。しかし、徐々に放牧養豚が始まっています。小規模な一貫飼育をして、地域にある資源で飼料を作り、地域の肉屋やレストラン、消費者とつながる。25頭以上には飼育頭数を増やさないという経営方針の農場もあります。

こうしたことを見ていると、アニマルウェルフェア畜産には2つの道があると考えられます。一つは、スーパー主導型のチェーンです。ロンディールのような、数

政が後退し、家畜福祉直接支払いは減額されているのが実態です。

市場経済のなかで家畜福祉食品をどう振興していくかについて、04年から09年まで、オランダのワーゲニンゲン大学が中心になって研究開発をしました。直接支払い政策の財政負担の限界が見えてきたことを背景に、フードチェーンの開発が主要な方向になってきたのです。

オランダでは、政府と企業、研究者、農業者が一体となってフードチェーンを開発しています。07年に豚の去勢廃止の宣言がなされ、チェーン開発の主体である小売り協会(スーパーマーケット)や食肉の企業、農業者、養豚経営者の組合を中心に業界の人たちが主導権を持ち、それを政府や動物保護協会が後援するというスタイルです。

ワーゲニンゲン大学を中心にした開発プロジェクトが始まり、そのなかからアニマルウェルフェア食品も含めた新しい概念として、「持続的食品」という言葉が使われ始めました。根底には、オーガニック食品は理想的だけれど、消費は頭打ちという現状認識があります。

オランダ政府は「持続的食品」につ



家畜福祉に配慮した「ロンディールシステム」の鶏舎(オランダのウェブサイト hollandfoodpartner.com/から)

万羽単位の鶏舎を持った生産に基づいて、スーパーのチェーンと結合する——これが主流でしょう。

もう一つは、小規模飼育と放牧型のアニマルウェルフェア畜産です。地元の中小企業や消費者グループの直売店とつながり、家畜のふれあい体験や音楽会などで交流をしながら、牧場内の生物多様性の保全といった新しい価値を見つけていく。単なる物の売買ではない、未来の価値に対する投資や交流という新しいつながりが出てきています。

(8月29日、八雲町内で収録)

※筆者のHP「滝川康治の見聞録」takikawa.essay.jp/ に本シリーズの過去記事を収録しています。ご参照ください。